

古翁追悼會記

師翁うせ給ひて早く十とせになりぬ。六月廿五日、竹柏園の今のあるじの君、其み祭つかうまつり給はんとす。つとめて起出ぬれば、雲厚く重なりて今か降出でんとする様なり。いかで今日一日はと思ひつゝ谷中なる御墓に詣づ。御名ゑりたる石をめぐりて幾もとの榊年ふりたり。石の鳥居くろかねの垣は、さきには木にてありしを、こたび新らしうしつらひ給へるなり。少し離れてたちたる五重の塔いたゞき霧に隠れて、杉の下露いと繁し。そこゝには落葉かき集めてやき捨たる跡あり。あはれ此煙細く白く立ちのぼる末にしも、宵々にすむらん月を、いかに眺めますらん。もてこし花さゝげつゝ御前にぬかづけば、いづこよりか白き蝶一つまひ出でたり。苔の下に靜に眠りますあたりよりやぬけいでし。いかなる夢か見ます。語れかしとはかなくも其行方うちまもられぬ。こゝの御祭は九時の頃よりなれど、さはる事あれば其由つげまつりて歸りぬ。

晝前より少し風さへ添ひて、雨まことにこぼれ出たり。今日のまゝに天も同じ思をやよする。いでさはいかばかりなりともふれかし君を忍ぶ人々の真心、など雨風に妨げらるべきなど思ふ。晝すぎてより忍が岡の梅川樓に至りぬ。けふの會にあづかる人たち、早く來み給ひて、こなたへくと樓上にあないし給へり。東久世伯奥平伯をはじめ、學の道歌の道に名ある人々、何の舎の君何の會の君たちうつし世にま見えしも、まみえまつらぬも、君を惜み君を忍ぶひとつ心に來集ひて、廣き廣間にあまりぬる程なり。さきつ年一年の御祭、五年の御祭ありし時にも、かくこそありしか。こはやがて翁の御徳の深きによる事と、榊の木のもと朝夕に立ならす吾等は、殊に

いひしらず嬉し。さるにても若し世にまさば、今年は七十路にもあまり給ふなり。同じくは喜字の御祝けふのやうに賑はしくつかうまつらんものを。さらば其折にはかの柱により給ひて、いかに長閑に物語し給ふらんをと、あかず口惜く誰も思ふ。正面の床には志め引きめぐらして、清らなる白木の八足に御たまやおきまつりたり其片へに昔の御姿、刀自の君のと並びいまして、何か語り給ふやうなり。さやかなる箏の音に、しめやかなる笙の調べ打そひて、我等が思を訴ふるやうなる時、開扉なし奉る。今ぞ御魂代と我等とは隔てなくなりて親しくこゝを見そなはず。種々の物奉り、しぬび辭奏しなどして、あるじの君まづ玉串さげ給ふ。幼き君たちは何事とも志ろしめさず、人に抱かれ給ひて同じくぬかづき給ふ。此小さき手して奉り給ふは、殊に嬉しと御心やとめ給ふらん。この世には祖父君とも呼びまさざりしかど、生ひたち給はん末までも、いづこの空よりか守りまさんとゆかしう思ひやられて、そゞろに涙ぐまるゝぞ、人の見る目もいとやさしきや。

文臺の上にはつどひたる人々のを始め、國々よりおこせられし懷紙短冊、うつ高く積み重ねたり。それを岡ぬしの披講あり。一つく何とかきこしめすらん。昌綱ぬしのは、

久方の天つみ空のいづこにか

けふのこの日を見そなはずらん

師の君のは、

天にいます吾父のみは聞しめさん

わがうたふ歌しらべひくゝとも

人々のもあはれなるがおほかれど、こゝにはもらしつ。石樽ぬしは

竹柏會委員の惣代として、み前に出で、去年より新たに此會を起し日に日に榮えゆく事どもこまかに聞え給ふ。福羽子爵のは井原ぬし代りて讀み給ひぬ。今より四十年の昔、近江の湖の舟の上にて故翁にゆくりなく逢ひ給ひしより、はかなくなり給ひつるまでのまじはりの程、残す方もなし。小出の君のは、かく賑はしきまとみの嬉しきにつけても、いとゞなき君の忍ばるゝ由をのたまひぬ。依田の君のは不破ぬし代りて讀み上げらる。歌の道にいさをありしこと、勅撰集のあとをつぐへき由おほやけに書を上り給ひし事など、漢文にてかき給へり。

某のぬしの手向けられし尺八は、音いとよくすみたり。かゝる折には絃なきがしめやかに似つかはしきなりとぞ。曲は月夜の鹿とかや折ふし雨も少し靜まりて、やさしき音廣間にみちたり。薩摩琵琶はいと悲壯なるを、曲は北白川宮臺灣入といふなり。竹の園生の御身をもて、遂にかの所に空しくなり給ふといふあたり、殊に靜になりぬ。

彼方の床には、翁の遺稿遺墨あまた並べたり。事につけ物にふれて御佛を思ひ出づる折多かれど、年月へぬればさしあたりたる其時のやうにはあらで、いとほいなきを、残し給ひし水莖の跡は、さながら其世の事を目の前に語り給ふ御聲のやうなり。こゝに人たち多くつどひて、これはあれはなど指さし、あるは手にとりなどしてゆかしがる。此中に、今の師の君の生れ出で給ひし折に、そを我母に知らせ給ひし御文あり。其御喜びの程まのあたり見ゆる心地して、言の葉の道傳へんとはかなくも吾命さへ祈らるゝかな、とあるを見るにも、今の師の君のかく家の風ふき傳へませるを、いかに御心安う

嬉しとおぼしめすらんなど語り合ふ。源氏物語土佐日記などの俚言解を物し給ひし折は、いつも御手づから其板下までもかき給ひにきかし。こゝにも多く並べられたるが風にひるがへりたる、これを見ませ何事もかく自らつとめ給ひし御いたづきの程を思へかしと、一ひら／＼に聲をなすやうなり。都にうつり給ひて程なく人々と寫し給ひしと見ゆる寫眞あり。自らの幼なかりし程の事は打忘れて、師の君もかく小さくましゝ折もありけんなど、人たち打まもる。こなたにはさまざまの繪に歌かきたる掛物あまたかけつらねたり。其中にあひ似たるやうなる竹の繪に歌かきたる二つ三つあり。こは翁の常に繪を好み給ひてかきましゝうち、殊にくれ竹のむなし心をめでましゝ故なりけり。

井上博士の演説は、故翁と共に大學の編輯所にありし事、翁の性質の天真爛漫なりし事、足代翁の學風を傳へ給ひし事、師恩を深く思ひ給ひし事などいとはばらかなり。御名をのみ聞きしりたる人々もかくこまかに常の御有様御心ばせを聞き、御姿はうつしゑにて見まゐらせ、猶其かき給ひしものを手にとりて、この世かの世のへだてはありとも、ちかしくなりぬる心地すべし。

本居の君の祭文は感いと深く、西刀自竹屋ぬしなどはそゞ妒に泪ぐみ給ひき。かくて式はてゝ盃めぐらす頃より、人々少し打くつろぎつゝ、こゝに彼所に様々の物語賑はへり。椽にたちて見おろせば外は雨はれがたになりて風あらゝかにふき、秋ならぬに木葉ちりかひたり。はるけき方は猶雨いたくやそゞぐ。見渡さるゝ森も多くの屋根も一つに黒み渡りぬ。彼くろき雲やがて又此方に來るらんかなといふ程に、庭に小さき犬のけたゝましう吠えたるに驚かされぬ。

これに思ひ出でぬるは、二十年ばかりも前つ方にやありけん。下谷にありける時、ある夕べ飼ひおける犬の、物にや驚きし、いといたく啼きしを、我母の出でてそこゝと見ありきしに、思ひかけず翁の未だ幼くましゝ師の君を伴なひて來ましゝになん有ける。今都につき給ひしを、我家居見あたらでこうじ給ひし由つけ給ひぬ。都に数多ある教子の中に、まづ我もとを訪ひ給ひしをいと嬉しき事と、常にいひ出でたるが、今は母もなくなりて久しうなりぬるを、犬の聲にゆくりなく思ひいでられしもいとあやし。火ともす頃人々かへる。師の君昌綱君を始め、大村ぬし吉野ぬし、入口にたちて人々を送りますに送られて我も歸る。入相の鐘森の木々にひゞき渡れり。此鐘翁の今はの夕べにもかくや響きしなど思ひつゞけて家にいたりぬ。歸りきて燈火のもとにかく一日の事を書き記すに、かうやうのものかきつる事なければ、いとく苦しきにつけて、我幼かりし程、よく勉めよと教へ給ひしを、たゞ遊びくらしゝ事、今更のやうに思ひ出られて罪いと深し。思へば其咎にて、かくもたどくしき筆のあと、いともくやさしけど、我父も母も翁の教子にて、殊には母あらば必ずこを物せんものと、其ちなみによりて、おぼ束なくもおふけなくもかいしるしぬ。あはれ今一度しかり給ふ御聲きくよしもがな。(明治三十三年六月廿五日)

底本…佐々木信綱編「竹柏園集 第一編」

明治三十四(1901)年二月十日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年九月十三日

橘糸重【散文作品集】に戻る。